



朝の渡し 揖斐川・船戸（福東）渡船にて（昭和30年10月）  
出典：写真集「輪中」（河合孝氏撮影）



福東大橋開通（昭和47年12月20日）  
出典：ふるさと「写真が語る輪之内町」

## 半世紀前まで暮らしを支えた渡し船

- 明治14年（1881年）の統計によると、岐阜県内だけでも172箇所の渡船場があったと記されている。そして、約100年前の明治時代までは、この地に架橋は無く、渡河するため各地に渡し船があり、渡船は会社業務に行く人や学校へ通ったり、買い物に出掛ける人たちに利用されるなど、日常生活に欠かすことができない貴重な交通手段であった。

現在では、揖斐川・杭瀬川を渡河する際は、国道21号線（新揖斐川橋）や県道岐阜垂井線（揖斐大橋）、県道羽島養老線（福東大橋）、県道大垣環状線（水都大橋）などの道路橋を使い、多くの車両が行き来をしているが、時代の流れの中で、各地で架橋が進められ、徐々にその役割を終え廃止となった渡し船。

そして、今、新たに大垣市と安八町間を結ぶ新たな新橋「大安大橋」の工事が進められている。今回は、今から半世紀前に、その大半が姿を消していった渡し船の当時の利用実態と生活の営みについて紹介する。

### 【大垣輪中の渡船】・・・大垣市

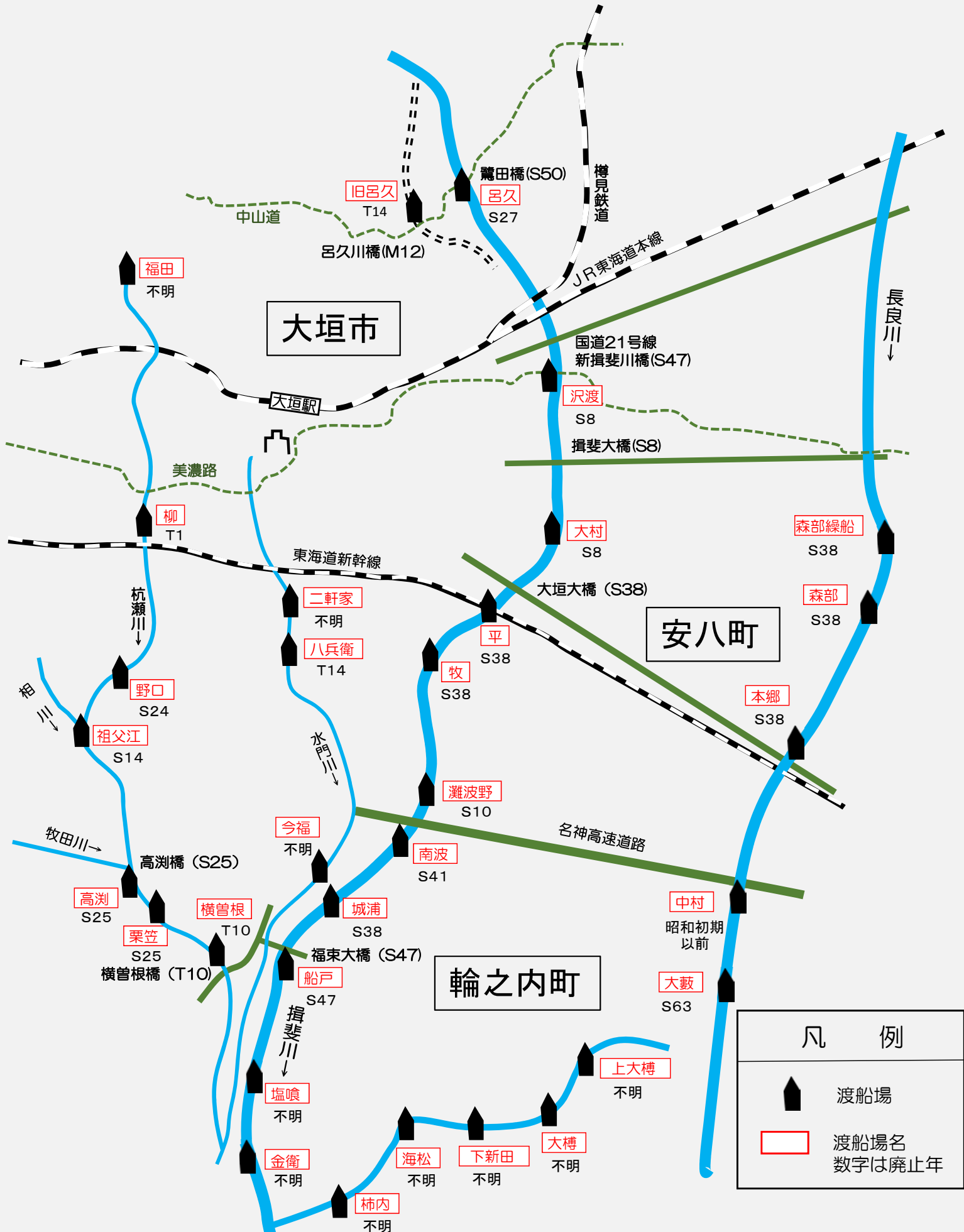
- 大垣輪中周辺の渡船は、揖斐川、杭瀬川（牧田川含む）、水門川に見られ、北の平野井川には見られなかった。中でも、揖斐川に設けられた渡船場は中山道の「呂久」、美濃路の「沢渡」、竹鼻街道の「平」、「難波野」「南波」「城浦」「船戸」など10箇所あり、杭瀬川沿いには、「野口」「祖父江」「高湊」「栗笠」「横曾根」など5箇所があった。水門川沿いには一本木（江並中学校付近）や今福など4箇所にあり、標高の低い低湿地の南部に渡船場が集中していた。（図1）

なお、主街道であった中山道呂久の渡しや美濃路の沢渡の渡しでは、通常2隻の舟で運行されているが、将軍や朝鮮通信使などの大通行があった場合は、舟橋を架設して川渡を行った。通行料（舟賃）は、沢渡の場合しばしば改定されている。元禄6年（1693）では1人につき4文、馬1匹につき8文、荷1駄につき8文であった。明治14年の岐阜県統計資料によると、前述の渡船場のうち12箇所の渡船の通行料が記載されている。

（表1）

# 大垣輪中等の渡船場分布図と架橋

【図1】



通行料で揖斐川は人が2～5厘、杭瀬川が2厘となっている。当時葉書が1銭（10厘）という時代から比較すれば、それほど高くない料金である。終戦後の揖斐川筋の通行料金は、人・自転車は10円、荷車・リヤカーは20円であった。また、水門川筋の今福の通行料金は、お金でなく米であったと言う。

なお、県営に移管された昭和30年（1955）頃から道路の一部ということで廃止になるケースが多かった。

表1 渡船船賃の一覧表 【単位：厘】

渡船場名	河川名	料金						
		人	馬	両掛	長持	人力	カゴ籠籠	荷車
沢渡	揖斐川	5	10	8	20	12	20	20
大村	〃	3	6	5	12	7	0	0
平	〃	3	6	5	12	7	0	12
牧	〃	3	6	5	0	7	0	0
南波	〃	3	6	5	12	7	0	0
城浦	〃	4	8	6	16	10	0	0
船戸	〃	4	8	6	16	10	0	0
塩喰	〃	4	8	6	16	0	0	0
きんね	〃	4	8	6	16	0	0	0
高淵	牧田川	2	4	3	8	5	0	0
栗笠	〃	2	4	3	8	0	0	0
横曽根	〃	2	4	3	8	5	0	0
祖父江	杭瀬川	2	4	3	8	5	0	0
野口	〃	2	4	3	8	5	0	0

<岐阜県庁蔵 明治14年岐阜県統計書より馬淵旻修作成>



風の渡し 揖斐川・平渡船（昭和31年10月）  
出典：写真集「輪中」（河合孝氏撮影）



郵便屋さん 揖斐川・船戸（福束）渡船（昭和45年3月）  
出典：写真集「輪中」（河合孝氏撮影）

渡船が櫂や櫂を操って川を渡る人力船では、夜間や増水時には命を失うこともあり、川を渡ることができなかつたため、兩岸に張り渡したワイヤーと滑車を使い、川を渡る「岡田式渡船」が考案された。

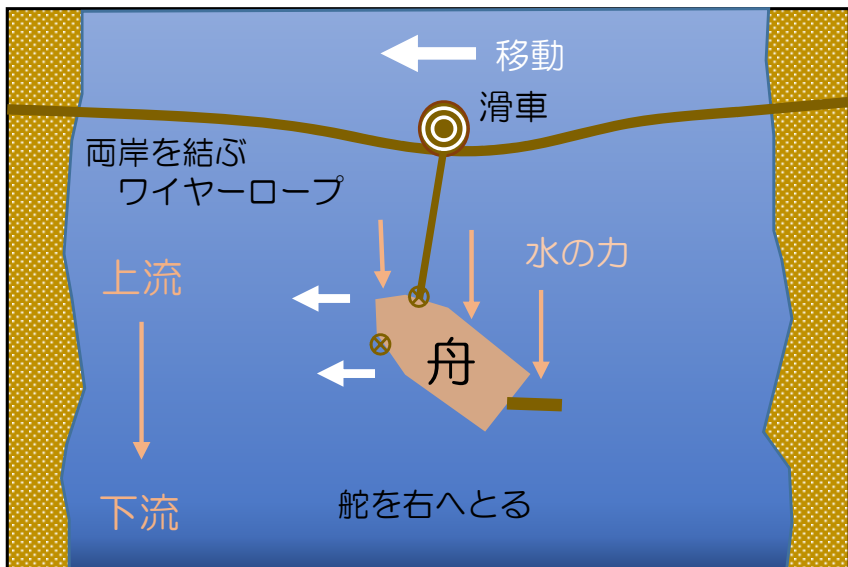
以降、大垣輪中の渡船の中で揖斐川筋は沢渡、平、牧、船戸の5箇所、杭瀬川筋は栗笠、高淵の2箇所で行われた。

揖斐川では最後の渡船として、昭和63年3月に揖斐川町島と池田町を結ぶ「島の渡船」（通称「白石の渡し」）が、三町大橋の架橋により姿を消した。

**岡田式渡船の仕組み**

岐阜県（関市保戸島出身）の岡田おかた ただし只次が考え出した渡船方法。兩岸の堤防間にワイヤーロープを張り、滑車を取り付けて、それに水の流れる力を利用して舟を進めるもの。これによって、かなりの増水時にも渡船ができるようになり、洪水による川止めが減少したと言われている。

岡田式渡船は最盛期には全国約60か所の渡船場における渡船方式として使用されていた。



## 【牧輪中の渡船】・・・安八町

- ・ 牧には、渡し船の仕事をする四人の船頭がいたと言う。日の入りから次の日の入りまでというように24時間働いていた。しかし、夜は利用者が少ないので、川沿いに建てられた船頭小屋で休んでいた。船頭がすっかり寝込んだ頃、急ぎの用事で船を利用する人は、向こう岸から「おーい、おーい、船頭さん！」と呼んでいたが、その声があまりに大きいので堤防を越えて村まで響き渡ってきたとも言われている。

この渡し船は、揖斐川の水が増えた時でもすぐには中止しないで船頭の数を増やし、櫓をこいで人々を安全に運ぶようにしていた。船頭の服装は、はっぴ、ももひき、ぞうり姿で、雨降りの時は、蓑、菅笠をつけていた。渡し船を買ったり、傷んだ所を直したり、また、船頭小屋や船つき場の手入れなどに掛かる費用は、全て村が出していた。

船頭小屋には、料金を書いた板が貼ってあり、その頃のお金で一人一回5厘をはらっていた。この料金は、大人も子供も同じで、夜は5割増しになっていた。また、遠くから来て利用する人や、近所で自転車や荷物などを渡してもらう時は料金の他に心づけを出していた。

牧の人たちは、渡し船に乗せてもらうお礼を、お盆と正月の2回に分け、米や麦で払うという利用の仕方をしてきた。船頭が家々を回って米一升、麦一升、時には米二升など集め歩くと、どこの家も普段、つつましくしていても、米が升からこぼれるほど山盛りにして出したと言われている。

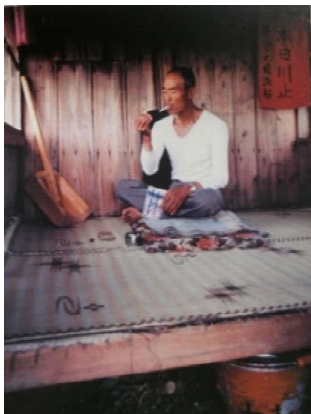
## 【福束輪中の渡船】・・・輪之内町

- ・ 揖斐川に接する福束輪中で、一番利用されたのは明治38年頃から始められた「船戸」の渡し。村で船頭を入札で決め、3人組による共同渡しであった。入札金は村で管理し、新しい船の買い入れなどに充てたという。渡しには、船頭小屋があり24時間交代制であった。後に県営になり、ロープ式に変わった。



県営大藪渡船終航の飾り船（昭和63年）

- ・ 長良川に接する福束輪中では、明治の末頃には、長さ13.5m、幅1.35m、定員36名の船で、2～3人の共同で渡していた。通行料金は、利用の多い近くの地区民が「通」と言って、1戸に米1升、麦1升を出していた。船頭は、日の出交替で、弁当、火鉢、布団を小屋へ持参し、客が来ると夜中でも渡したと言う。



渡し船小屋で束の間の一服

出典：ふるさと「写真が語る輪之内町」

- ・ 大樽川に接する渡しの中で、一番利用されたのは「海松」の渡し。通行量は平均すると、1日に30～50人ぐらい。日によっては今尾行きや、須脇参りで混雑したので、船頭が2人出て捌いていたと言う。

### 参考文献

大垣市史（輪中編） H20.3月 大垣市発行  
ふるさと安八町 S61年 安八町教育委員会編  
ふるさと輪之内 H元年 輪之内町  
わのうち百話 S60年 輪之内町30周年記念事業委員会